

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■ 発行人 / 荒山 淳

■ 発行所 / 真宗大谷派名古屋教区教化センター



御下向最終日（4月23日）の夕刻。吉崎別院に向かって旧北陸道を行く蓮如上人御影道中一向。
*2017年4月撮影 (写真の無断転用はご遠慮ください)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 聖典研修 第23・24回
『仏説阿弥陀経』 —その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・ 研究員特別レポート
蓮如上人御影道中の
起源に関する覚書 ④・⑤
- ・ 現代社会と真宗教化
カルトから問われる宗教的涵養 ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集（※寺報などにご利用ください）

身をすてて、平坐にて、皆と

大きく物なり

（『聞書二二〇』 聖典八七七頁）
一句一言を聴聞するとも、ただ、得
手に法をきくなり

（『聞書一三七』 聖典八七九頁）
と、四五人の御兄弟・同行と聞法する
時に陥りがちな問題を誠め「談合せよ」と勧める。

これらは「一宗の繁昌」を願う蓮如上人の自戒の言葉だ。他力の宗旨を乱す自見の了解に注視し、一人にても信を獲る、弥陀の本願を本とする場・本願寺が開かれることをひたすら願ったのだろう。そんな蓮如上人の姿勢こそが、人々を集め、上人亡き後、五百年を超えた今でも御影道中が続けられている所以なのだろうか。

室町の世、この国は応仁の乱によって悶死の現実が繰り広げられた。こうした戦乱のなか、蓮如上人は積極的に民衆の間に入り、
朝夕、『正信偈』・『和讃』にて念仏
もうす

（『聞書三二』 聖典八六〇頁）
ことを勧められた。また、お勤めの最後には『御文』を「上段」に坐って拝読するのではなく、御同朋御同行と身を同坐のところに据えて読むよう勧められていかれた。また御法談已後、
四五人の衆、寄り合い談合せよ。
必ず、五人は五人ながら、意巧に

お寺が消えて無くなるのが問題なのではない。私が聴聞しても意巧に聞く。自分が言い当てられて恥ずかしいと思っただとしても、その時だけのこと。自分の得手勝手な見解で、了解したつもりで語ることが、聴聞し談合せあう僧伽を乱し、破壊していたことか。自身の姿勢が一番の問題であったのだ。
「お寺が消える」と聞き、「門徒一人もあらず」の慚愧はあるか。身分をすてて、平坐にて、皆と出あい、民衆に教わり聞き続けた再興の上人、蓮如に我が身を憶うのである。

（主幹 荒山 淳）

聖典研修

『仏説阿弥陀経』―その教義と真宗の儀式―

第二十三回 二〇一七年四月十四日(金)

私たちの代表である「舍利弗」

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



長老なのか？ 増上慢なのか？

『仏説阿弥陀経』において、釈尊は三八回「舍利弗」と呼びかけておられます。その点を考えれば、舍利弗が大きな役割を担っていると言えます。同時に押さえておきたいのは、鳩摩羅什(以下、羅什)が翻訳した他の経典にも、舍利弗は登場し、一つの役割を担っているということなのです。それ故、当時の中国の人たちは、それら諸経典に表された舍利弗の姿を総合して考えた上で、『阿弥陀経』に登場する舍利弗も見ていたと想像できます。

舍利弗が智慧第一と讃えられていたこと、そして教団を任せても良いと思うくらい釈尊からの信頼が篤い仏弟子であったことは間違いない。『阿弥陀経』でも「長老舍利弗」(『聖典』一二五頁)と、対告衆の中で最初に名前が挙がっています。そこには優れた仏弟子であることが示されています。

ただ大乘経典において、舍利弗を含む仏弟子と言われる方々が、「大乘(菩薩)」

に対する「小乘(声聞・縁覚)」という方向の意を含んで描かれていることには、注意が必要でしょう。「小乘」の原語は「ヒーナヤーナ」、つまり立派な大乘の教えに對して「劣った乗り物」という意味があるのです。このことは羅什が訳した『妙法蓮華経』「方便品」において、舍利弗に対して次のように説かれていることから窺えます。

又舍利弗よ、是の諸の比丘・比丘尼にして自ら已に阿羅漢を得たり。是れ最後身なり、究竟の涅槃なりと謂いて、便ち復た阿耨多羅三藐三菩提を志求せずんば、当に知るべし、此の輩は、皆是れ増上慢の人なり。

〔『大正蔵』九卷・七頁・B-C段〕
 仏弟子として最高の位である「阿羅漢果」を得て満足し、自分は分かったと閉じこもる在り方を「増上慢」だと仏は指摘されます。一方、大乘のさとりのである「阿耨多羅三藐三菩提」とは、全ての人を救う仏の世界、つまり自分だけで終わらずに全ての人のさとりに繋がるということでしょう。仏は阿羅漢の代表である舎

利弗を論ずることを通して、大乘の方向を示しておられるのです。

舍利弗、沈黙させられる

もう一つ、異なる経典を見ていきましょう。羅什訳『維摩詰所説経』(以下、『維摩経』)には「維摩」という在家信者が、「出家しなければさとりができない」と考える比丘たちを沈黙させることを通して、大乘の教えを説く部分があります。次の文章は『維摩経』「弟子品」に説かれる部分ですが、今回は現代語訳された石田瑞磨氏の著書から引用しました。

やあ、舍利弗さん。坐ることが坐禅(宴坐)ときまっていますよ。…中略…さとりを道あるながら、世俗の日常生活(凡夫事)を送ることが、坐禅なのですし、…中略…煩惱を断ち切らないで、究極のさとりに(涅槃)に入ることが坐禅なのです。もしこのように坐ることができれば、仏はよろしいとおゆるしになるでしょう。

〔『維摩経』不思議のさとりに 二七―二八頁〕
 座禅をしていた舍利弗に対し、維摩はこのように語りかけるのですが、舍利弗は何も答えられなかったのです。

ここで言う座禅とは、座って行われる瞑想のことです。維摩は、座禅の次第を守って修行すれば答えが出るという自力的な考えを批判したのだと思います。煩惱を断たなくとも、仏は向こうからやってきてくださる。こちらから向かうので

はなく、いただいていく仏道を示しているでしょう。

〔『維摩経』において舍利弗は度々登場します。座具もない維摩の部屋に入り、「いったいどこに座ったらいいのだろう」とか、別の仏国においては「この仏国の人は何を食べるのだろうか」というような余計なことばかり考えている者として、また、この土が釈迦仏の浄土であることに気づいていない無知な者として描かれています。そこには、これまでの仏教(小乘仏教)に対する批判が示されています。

『仏説阿弥陀経』の対告衆

みなさんも聞法していて「なるほど」と思った瞬間があると思います。しかし次の瞬間には「私は分かった」となり、解の違う人に対しては「あの人は分かっていない」となります。いつでも仏の側に一歩でも近づこうと考え、時には、覚りに近づいたと思う煩惱を生きています。それが「増上慢」なのです。

他方の仏教と聞き、自力を否定する。仏道とは、仏とはこういうものだ、自分の中で定まった答えを持ち、それに向かつて行こうとする。つまり、私たちは仏教を人間の側へと引き戻してしまふことしかできないのです。舍利弗に対して、釈尊が、問われないにもかかわらず、自ら「舍利弗よ、浄土がある」と何度も述べられたのが『阿弥陀経』です。釈尊の声は一体だれに向けられているのでしょうか。

第二十四回 二〇一七年五月十八日(木)

本願の信心を開くもの

講師 廣瀬 惺氏 (大垣教区妙輪寺住職)



仏が特に力を込めた一段

前回「本願に救われる」と申し上げましたが、そこには、「どのようにして本願の信心が開かれるのか」という問題があります。そこで「念仏往生を勧める」一段の、次の教説に学んでいきたいと思

ます。
舍利弗、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心にして乱れざれば、その人、命終の時に臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と、現じてその前にましますん。この人、終わらん時、心顛倒せずして、すなわち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得ん。

〔聖典〕 一一九頁

私たちに本願の信を開こうとする仏陀の大悲といえますか、非常な力を感じる一段です。「もしは一日、もしは二日、もしは三日……」として、仏は力をこめて説いておられます。親鸞聖人は『教行信証』において、この個所を『阿弥陀経』の中心になる教説としていただいております。

れます。

では、どのようにして信心が開かれるのかですが、結論を先に申し上げますと、ここに説かれておりますことは聞法と称名念仏です。本願が、私たちの救いとしていただかれる道は、この事に尽くされるところです。そのこと以外に、本願の信心が開かれる方法はないと教えられているわけです。

「阿弥陀仏を説くを聞きて」として、聞法が教えられています。そして「名号を執持する」として、称名念仏が教えられています。親鸞聖人はこれら二つのことを獲信の因縁として押さえていらつしやいます。

「正信偈」に「光明名号顕因縁」(『聖典』二〇七頁)とあります。ここに「光明」として述べられているものは教えでしよう。この「正信偈」の出拠であります善導大師の文について記しておられます、「行巻」のお言葉を「ご覧ください。」

かがゆえに宗師は、「光明名号をもつて十方を攝化したまう。ただ信心をして求念せしむ」(礼讃)と言えり。また「念仏成仏これ真宗」(五会法事讃)と云えり。また「真宗遇いがたし」(散善義)と云えるをや

〔聖典〕 一九〇〜一九一頁

とあります。

この善導大師の文のみで申しますと、「真宗遇いがたし」という『散善義』のお言葉は「云えるをや」と記しておられます。しかし同じ善導大師の文であります『往生礼讃』の「光明名号をもつて……」の文は、「言えり」と記しておられます。親鸞聖人は、經典の文をお引きになる時に「言」の字を用いておられることからして、この『往生礼讃』の文は善導大師の文ですが、それを仏のお言葉としていただいておりますことを表しています。仏の金言(不変の言葉)だということですから、そのように、人生の根拠となり往生成仏の生活を実現する本願の信心は、聞法と称名念仏が因縁となって、私たちの思いはからいを超えて発起する心だということです。

命終時の往生

この個所の今一つの問題は、この一段には念仏によって浄土に生まれることが説かれています。その往生について「命終の時に臨みて」と説かれていることですから、この教説をどのようにいただくのかという問題があります。

これまで申し上げてきたことですが、親鸞聖人が教えてくださったことですが、私を立場とする在り方が終わる時、私たちに開かれてくる世界であり生活であるということでした。ですからここで親鸞聖人は、「命終」を肉体の命終ではなくて、自力の命終と受け取っておられると考

られます。

「一念多念文意」において親鸞聖人は、『阿弥陀経』のこの個所に相当します『往生礼讃』の「恒に願はくは一切臨終の時、勝縁・勝境ごとく現前せん」との偈文、つまり、命終するとき素晴らしい境界が現れますようにという一文を、次のように解釈しておられます。

「一切臨終時」というのは、極楽をねがうよろずの衆生、いのちおわらんとしまで、ということばなり。

〔聖典〕 五三四頁

『往生礼讃』に「臨終の時」とありますのを、「いのちおわらんとしまで」としておられます。宗祖は「まで」という二文字を加えられることによって、往生を現在のこと、信の一念の時のこととしていただいておりますと申し上げていいのではないかと思います。

浄土や往生について、私たち人間の思いで対象化して未来のこととしてとらえるのではなく、迷いの身として生きている私たちに、「南無阿弥陀仏」として発起してくる信の一念におけることとして、すなわち、信の一念における自覚的な事柄として明瞭にしてくださいだったので、親鸞聖人ではないでしょうか。

『仏説阿弥陀経』―その教義と真宗の儀式―の抄録は今号で終了です。

*次号からは「親鸞聖人の御生涯に聞く」(講師・東館紹見氏)をテーマとした聖典研修の抄録を掲載する予定です。

員
研究
特別レポート

蓮如上人御影道中の

起源に関する覚書

研究員 小島 智
こじま さとし

はじめに

二〇一五年、筆者は名古屋教区第四組・推進員養成講座前期教習の講師となり、そのカリキュラムとして蓮如上人御影道中を歩く御縁をいただいた。それは御下向のみの、それも一日（四月二十二日）だけの参加であったが、何ものにも代えがたい体験であった。さらに今年になり、上人御影の吉崎別院御到着にも出会わせていただいたことは、改めて真宗の信仰文化を考える貴重な機縁ともなった。本稿では、第四組で行った御影道中事前講義のうち、とくに道中の起源につ

いてまとめておきたいと思う。

この御影道中は周知のとおり、真宗大谷派吉崎別院（福井県あわら市）にて毎年四月二十三日から五月二日まで勤められる蓮如上人御忌法要に際し、本山（東本願寺）所蔵の上人御影を御櫃に収め、さらに御輿に載せて、吉崎別院までの間を往復徒歩でお運びする仏事である「表紙写真参照」。吉崎別院への御下向は四月十七日から二十三日まで、寺院・門徒宅に立ち寄りながら進む六泊七日の行程であり、復路である本山への御上落は、五月二日から五月九日までの七泊八日の行程である。



蓮如上人御影（真宗大谷派旧蔵）

御影裏書
*「東本願寺および大谷大学所蔵優品展 特別展 蓮如上人」図録（1997年、大谷大学図書館）26頁より転載。

本願寺釈教如（花押）
慶長拾六^辛稔二月廿八日
越前国坂北郡細呂宜郷
吉崎惣道場物也
蓮如上人真影

たのが上掲写真の蓮如上人御影である。ただしこの御影は、一九九九年十月に所有権が真宗大谷派から離れてしまった。その為、二〇〇〇年四月、吉崎別院に奉掛されていた享保六（一七二一）年下付の御影を「御帰山」させ、以後そこからをお運びし御忌法要が勤修されるようになっていた。しかし、御影道中の由来を尋ねるには、やはりそもそもの上人御影を調べる必要があるの

で、まずはその裏書を確認しておこう。

は、本願寺が東西分派してしばらくの慶長十六（一六一一）年、東本願寺教如上人から「越前国坂北郡細呂宜郷吉崎惣道場」に下付されたものであることがわかる。文明七（一四七五）年八月に蓮如上人が退去してからの吉崎坊舎は、永正三（一五〇六）年、越前朝倉氏によって破却され廃坊となったが、その後、坊舎跡山下に二つの道場が建てられ、それが本願寺の東西分派とともに東派と西派に分かれたという^①。この裏書にある「吉崎惣道場」とはそのうちの東派道場のことであり、この道場が吉崎惣道場願慶寺となり、吉崎御坊願慶寺、そして御坊と願慶寺が切り離され、さらに明治期に御坊が別院と改称されて現在に至るわけである。

では、御影道中はいつから始められたのであろうか。実は、これに関しては今まで明確な記録が確認されておらず、はっきりしていない。しかし、伝承に基づきいくつかの説が語られており、主に延宝年間（一六七三〜八二）、享保七（一七二二）年、宝暦年間（一七五一〜六四）の三説に分けられるようである^②。ちなみに、真宗大谷派としては今年で三四四回目としているので、年一回行われてきたとすると、その開始は延宝二（一六七四）年となり、延宝年間説によつてい

さそうである。

そのような中で、筆者としては享保七年説に注目したい。これは福井県金津町吉崎史編纂委員であった朝倉喜祐氏によつて提唱されたものであるが、吉崎別院に隣接する願慶寺所蔵の膨大な古文書に基づくもので、その著書『吉崎御坊の歴史』（一九九五年、国書刊行会）に詳述されている。願慶寺の古文書群は現在その一部が北西弘氏により翻刻出版され^③、御影道中に関連する記録も見ることができ

るが、特に享保六年の次の文書は御影道中の起点として重要である。

端書無之
往古其道場へ被成御免候 信證院御影漸く可及損却付今度右之 尊影御写被成下候間難有被存 渴仰尤候
御賛 御名 御裏書等者追而 可被

成下候 為其如是候也
享保六丑年八月廿八日

若林藏人 (花押)

七里弾正重順 (花押)

下間治部卿法橋頼伴 (花押)

越前国坂北郡

細呂宜郷吉崎

御坊^④

これは東本願寺坊官より吉崎御坊に宛てられた文書で、先述の享保六年下付蓮如上人御影の添状である。これに先立つ天和二（一六八二）年、吉崎惣道場は寺号を授与され「吉崎惣道場願慶寺」となり、さらに享保六年、願慶寺は御坊に取り立てられ「吉崎御坊願慶寺」と称されるようになるが^⑤、それに際して八月二十八日付で達せられたのである。これによって、御坊取り立てと同時に、古く損傷のある慶長十六年教如上人下付の蓮如



お立ち寄り所では、教導が調声人となってお勤めし、御文を拝読したあと短い法話を行う。門徒宅での様子。(2015年4月撮影)

上人(信證院)御影は本山へ上納され、代わってその写しが下付されたと推測されるのである^⑥。

しかし、教如上人下付の御影は、延宝五(一六七七)年、東西本願寺の吉崎山上所有権をめぐる争いに対し、江戸幕府がその山上を直轄地として双方の管理を禁ずるまで、蓮如上人御忌法要の際には山上に移され仮屋に奉掛されて、お勤めがなされてきたものであった^⑦。延宝六年からは山下の惣道場にて勤められることになったが、吉崎の門徒衆にしてみれば、山上御旧跡地で蓮如上人と相まみえる「生身の御影」として、語り継がれてきたものであつたらう。故に、御忌法要にはこの御影がなくてはならなかったのであり、法要期間のみ本山より「お返し」いただき、法要後にはまた本山へ上納する御影道中が始まったと考えられるのである。

ある。さらに、それを裏付けるものとして、文政七(一八二四)年十月に本山へ提出された願慶寺の由緒書がある。ただ残念ながら、全体を翻刻したものが刊行されておらず、実際の文書も管見に及んでいない。しかし、朝倉喜祐氏の前掲書に、同氏翻刻のものが一部掲載されているので、関係箇所を引用しておきたい。

慶長年中、祐念より四世祐親は教如様に御帰依申しあげ、同拾六年二月、蓮如様御影、教如様御自画、御銘御裏等御染筆あそばされ祐親へ御手ずから御授与なし下され候事。

但し此の御影享保六丑年より御本山へ御引上げに相成り毎年三月御下向の事^⑧。

ここから、少なくとも文政七年までは、蓮如上人御影道中は、享保六年の本山への教如上人下付御影「御引上げ」が起点となり、翌年より始まったと認識されていたと分かるのである^⑨。

さて、延享四(一七四七)年九月、新たに吉崎御坊本堂が落成する。これ以後、吉崎御坊と願慶寺は分離、願慶寺は「御坊列座留守居」となり^⑩、御忌法要も御坊本堂にて勤められるようになったと思われる。

むすびにかえて

先述のように筆者はこの四月、蓮如上人御影の吉崎別院御到着に初めて出会い、「お腰延ばしの儀」と初夜勤行にも参詣させていただいた。内陣御代前に御影が奉掛され、満堂の参詣者が親しく瞻仰する姿を拝見して感じたことは、一人一人が「蓮如さん」と改めて出会われているとい



道中、沿道のいたるところから懇志が差し出される。(2015年4月撮影)

うことであつた。これは何も本堂内に限ったことではない。通り過ぎ行く御影に合掌する沿道の人々や、お立ち寄り所でお迎えする人々。そして何よりも、随行の教導と道中責任者たる宰領・供奉人、さらに自主参加で歩く人々の姿は、まさに生身の「蓮如さん」と対話をしているかのようにあり、筆者自身もその思いであつた。その意味では、御影道中を伝えてきたものにとつては、その時その時が重要なのであり、始まりがいつなのかは二次のことであつたと言えよう。

しかし、伝統的な仏事が伝わりにくくなっていく現実もある。次代へ受け渡すには、願いとするとところを明確にしておかなければならない。その為にも、この稀有な仏事に関する記録を、網羅的に調査整理する必要があると痛感した次第である。

- ① 金龍静著『蓮如』(一九九七年、吉川弘文館)一七・八頁、網田義雄著・真宗大谷派福井教区教区研究所補訂「補訂 越前真宗誌」(二〇一二年、法蔵館)二五五〜八頁参照。
 - ② 阿部法夫著『蓮如信仰の研究―越前を中心として―』(二〇〇三年、清文堂出版)三二〜四頁参照。なお、古老の語りとして承応二(一六五三)年説もあるという。
 - ③ 北西弘編著『吉崎御坊願慶寺文書』(二〇〇五年、清文堂出版)。
 - ④ 註③書、一五四・五頁。
 - ⑤ 朝倉喜祐前掲書、第四章、第五章参照。なお、享保二十(一七三五)年九月十四日付の東本願寺坊官沙汰書には、「然者吉崎御坊之儀、去秋冬両度御下知之節茂各承知之通、願慶寺 寺庵、御坊と御改」(註③書一六一・三頁)とある。
 - ⑥ この時下付された蓮如上人御影が、現在御影道中で依用されている御影である。
 - ⑦ この寛文十三(一六七三)年から延宝五(一六七七)年までの「吉崎山上一件」と称される争いについては、「延宝五巳年 山上一件公訴江戸御坊日記之写」並びに「粟津家藏記写之 延宝年中山上一件記」に詳しい。どちらも註③書に翻刻所収。なお、御影道中の創始を延宝年間に求める説は、この吉崎山上の争論にその起源を見ようとするものである。
 - ⑧ 朝倉喜祐前掲書、二五〇頁。言うまでもなく、旧暦三月二十五日が蓮如上人の命日である。
 - ⑨ また、これを遡る安永二(一七七三)年九月に願慶寺より福井藩に出された由緒書の下書きが、『福井県史 資料編四』(一九八四年、福井県)に「願慶寺文書」の一つとして翻刻されている(五二〇頁)。これも御影道中に関する部分を引用しておく。
- 夫々六世祐意二本山分願慶寺と寺号被下罷有候所、七世祐忠之代二罷成本山分被仰越候ハ、何卒当吉崎二掛所建立被成度旨二御座候へ共、天和二年分新地御堂相立候儀公儀分御停止二付、右願慶寺御堂を掛所御堂二建立有候之候、尤其節本山分公儀江御達有之候所、御許容有之候、夫々 毎年三月蓮如上人御影 京都分御指下、御法会有之候御事、
- 「掛所」とは「御坊」のことであり、ここからも享保六年に願慶寺が御坊に取り立てられて、当初の蓮如上人御影が上納され、その写しが下付されたのがきっかけとなり、吉崎御坊御忌法要への御影御下向が始まったと窺うことができる。

⑩ 朝倉喜祐前掲書、第五章参照。

現代社会と
真宗教化

講義抄録

カルトから問われる

宗教的涵養

北海道大学教授

櫻井義秀氏



さる二月九日、櫻井義秀氏を講師に迎えてカルト問題学習会（教区教化委員会都
市教化部門主催）が開催された。

現代社会において「カルト」という言葉が耳慣れて久しいが、私たちはどれだけ
その内実を認識しているのだろうか。カルト問題を考えるということは、同時に私
たち真宗門徒が親鸞聖人の示された念仏者・僧伽のあり方に相応しているかを問う
ことである。その課題の共有を願い、抄録を掲載いたしました。

カルトとは

「cult」（以下、カルト）とは先祖
祭祀や儀式、儀礼を意味し、元来悪い意
味を含みません。しかし、アメリカでは
主流派であるプロテスタント以外の宗教
に対して「伝統的な宗教団体とは異なる
特別な儀式、見慣れない儀式を行う団体」
という意味合いで使われるようになり、一
九七〇年代に「人民寺院」というキリス
ト教系の団体が南アフリカのガイアナ共
和国で起こした約九百二十人の集団自殺
を発端に、「社会問題化する宗教」という
意味での「カルト」という言葉がマスメ
ディアで定着してきました。このような
表現が日本にも入ってきたのです。

日本では、韓国で生まれたキリスト教
系の新宗教である「統一教会」が話題に
なった一九九〇年前後にカルトという言
葉が使われるようになりました。壺や数
珠を売る靈感商法で有名な団体です。他

には長野県松本市でサリンを散布して市
民を殺害し、一九九五年に東京の地下鉄
でサリンを撒いて十三人を殺害し、六千
人の方に重軽傷を与えた「オウム真理教」
もカルトといわれています。

特徴的な活動は勧誘です。一般に布教
活動とは、自分たちの教義や宗教活動を
伝えて「よかつたらどうぞ」というもの
です。しかし、カルトは自分たちの教義
や活動を伝えません。このような正体を
隠した勧誘は違法行為です。

自分の信念に従って、それを他者に伝
える布教の自由は認められています。し
かし、それを受ける側の信教の自由も考
えなくてはなりません。つまり、布教さ
れた時にそこに入るべきか否か、時間的
余裕を持って熟慮する自由も保障されな
ければなりません。ところが、カルト団
体は「今、決断しなさい」「家族や友達に
相談してはいけない」「セミナー受講料の
うち千円でも今すぐ納めて」という言い

方をしてゆつくり考えさせないのです。こ
の即断即決とか手付金を払わせるという
やり方は詐欺商法と全く共通しています。
他者の信教の自由を侵害する信教の自
由というのは認められません。要するに、
日本では布教する主体の信教の自由ばか
りを取り沙汰されて、受ける側の信教の
自由が見落とされがちです。受け手に敬
意を払わない布教はあり得ないのです。

伝統宗教は風景である

オウム真理教は一九八〇年代初頭にヨ
ガ団体として生まれ、信者が増えるに従
い宗教団体へと変転しました。最終解脱
者と名のつた教祖、麻原彰晃が様々な本
を出版したりメディアに出て、一九九〇
年には「真理党」として衆議院選挙に出
馬しました。しかし約五千票しか取れな
かった。それで彼らは票がすり替えられ
たと妄想し、自分たちを権力や謀略組織
の犠牲者、抑圧された者だと被害妄想を
膨らませました。そしてサリンを製造し、
武装化していきました。これは教祖の妄
想に信者が共鳴したのだと思うのです。

その共鳴の背景には、一九九〇年前後
のバブル経済の好景があります。当時
私が勤めていた大学では、学生一人あた
りの求人十六倍でした。どこにでも就
職できるという空気が、「私にはもつと
別の才能がある」「ここは私の居場所では
ない」と、欲求のレベルを上げました。つ
まり、仕事は食べるためではなく自分を
活かすためのものであり、それに相応し
ない仕事は辞めてもいいのだと。フリー
ターという言葉が出始めたのもこの時期

です。

このバブルの物質主義的な時代の中で、
本当の幸せを求め、世の中をよくしたい
という使命感に燃えた人たちが現れまし
た。その人たちが、一見すると禁欲主義
的なオウム真理教に魅せられたのです。
当時オウム信者が伝統宗教を「日本の風
景である」と表現していました。「宗教は
今苦悩している人のために何かすべきだ」
と考えた宗教に関心を持った若者たちが、
伝統宗教ではなくオウムに身を投じたの
です。

自分で考えない

麻原は「真理」というものがあり、それ
を悟った者がいる。その悟った真理の内
容を、あなた方信者はそのまま受け取れ
ば絶対に幸せになるし、解脱できる」と
いう言い方をしました。それでチベット
仏教の灌頂を真似て、シャクティパット
（弟子の額に手を当てて念を送る）という
ことを始めました。しかし信者が増えた
ことを始めました。しかし信者が増えた
煩わしさから、極めて安易に当時の情報
科学を転用しました。自分の脳波を記録
（真理のデータをコピー）させて、弟子に
ヘッドギアをかぶせて、電極をつないで
脳波を流す（インプット）。このヘッドギ
アセットに百万円払った人もいます。あ
るいは、麻原の脳波を水の中に流したも
のを甘露水と称して販売したり、彼が入
った風呂の湯を水で希釈して、悟りを得
るための特別なドリンクとして高額で売
る。まさに靈感商法的な団体に変容して
いきました。

自分で物事を考えない人間を作り出す

手法は、カルト特有のテクニクです。「人間は自分でいろいろ考えようと、自分の欲望に従ってしまい道を踏み外す。そして人類は悲惨な歴史を繰り返してきた。だから自分の欲求に従ってはいけません。神様の言葉に従いなさい。しかし、あなた方は魂の水準が低いために直接神の言葉を聞けないので、神様の代理人である私(教祖やその意思を付度している弟子たち)の言うことを聞きなさい」という理屈、要するに自分の上司が最高の権威の代理人であり、その言葉には絶対に従わなければいけないという仕組みです。だから自分で何かを考えたり、やりたいという問いや欲求を持った瞬間、それを押し殺す。それこそが信仰であり、解脱への近道だと教えられ続けるのです。

麻原に従ってサリンを撒いた心臓外科医の林郁夫という人は手記の中で「自分はこれまでいろんな形で人を助けてきたが限界があった。しかし宗教的な教えに従えば、限界を超えてあの世まで含めて人助けができる。その大義のためには、目の前の人たちがサリンで亡くなってもいいと考えていた」と語っています。

また統一教会の元信者は、密室で取り囲んで壺などを買わせる時、目の前の人が通帳に五百万円持っていたら、たとえ「子供のための預金です」と泣き崩れようが、マニュアルに従って「地獄に落ちる」「祟りだ」と言いたてて徹底的に追い詰める。元信者は、「私が命令するのではなく、神の言葉の通過点だった。それが信仰だと思っていた」と語っていました。

自分を殺して何かに従うことが信仰だと錯覚し、自分を通過点にしてしまう。何

も頭で考えず、ルールや規則、上位の意思や組織に従えば自分は正しい(間違わない)し、自分に責任はない。これは戦前の軍隊の仕組みに非常によく似ています。正しいことは世の中に一つであり、それに従わないのは非国民である。あなたの選択は従うのか従わないのかの二つであり、その他の意見は排除されるのです。ところで、「考えない」ということは実は楽なのです。ですからこの問題はカルトだけではなく、官僚制的な役所や会社や宗教に携わる者でさえ、組織の中ではそう変容しかねません。突然ではなく、少しずつ小さな集団から、ひいては日本全体が変わってしまうのです。

承認しあう場の喪失

オウム真理教の信者はある種、使命感に燃えていましたが、現在の「アレフ(Aleph, オウム破産後の改名団体)」の信者は異なります。単純に居心地がいからやっているのです。アレフの道場に通うと、上の信者の人たちがとことん話を聞いてくれるわけです。そこまで自分の事を認めてくれる場は、実は他にあまりないのです。カルトというのは、どうすれば人の心が動くのかよく理解しています。現代人の欲求は、個別指導塾のように一対一で自分の存在を認めてもらうこと、心理学の言葉でいう「承認」だと見抜いています。

今SNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)が流行っている理由は、

容易に相互承認しあえるツールだからです。しかしあくまで仮想空間での承認なので、やはり現実には「いいね!」と認めてもらいたい。そういう日常生活の中でなかなか承認を得られない人たちがつまずき友だちがいらない若者や、シングルマザーなどの、日々仕事や生活に追われて友人と会って話すことができない人たちが今、アレフに通っています。過去にあれほどの犯罪をした団体にも関わらず、足を運ぶ理由は承認欲求なのです。

今、大学でもアンケート調査をすると「大学が楽しくない」「友人がいらない」という学生が割ほどいます。自己承認を求めながらも、しかし自分から人間関係を作れない学生たちは、いくら「カルトにご注意」と啓発しても、そのニーズにうまく応えるように見せかけるカルトにどうしても入ってしまう。

若者でも中高年の人でも、友人や近所付き合いや趣味の会などで、互いに「この人を知っている」という関係が複数あれば、すぐにはカルトに行きません。しかし現代社会はそのワンステップが喪失しています。つまり学校や家庭だけではなく、地域の教育力や人間関係が必要なのです。

宗教に問われる涵養力

カルトの問題性は、「自分で考えない」ということを徹底して教えることなのです。宗教的な粉飾を加えて、その人の自主性や自立性を剥奪し、人格を変えてしまうことがカルトの恐ろしさです。カルトでは信者が入信し、すぐに自分で布教

に行きます。その人自身が充分「これがいい」と理解した上で、他の人に布教することはいい。しかし、人が成長するには多くの時間を必要とします。その成長を外側から見守りながら、その人が自分で成長していく力や考える力をどれだけ養えるかということが宗教の根幹の役割でしょう。ゆえに宗教とカルトの違いは、その人に正しさをそのまま仕込んで変えるということではなく、「人を育てる」ということだと思っています。

それが現在の大学教育の課題であり、地域教育の課題であり、宗教が本来担っている課題だと思っています。



◆カルト問題でお困りの方◆

本山の青少幼年センターでは、カルト問題に関する相談窓口を開設するとともに、さまざまな情報提供や取り組みを進めています。

真宗大谷派 青少幼年センター 相談窓口
TEL: 075-354-3440
HP: <http://www.higashihonganji.or.jp/oyc/cult/>

大谷派の近現代史 報告 「2017 あいち・ 平和のための戦争展」に出展

主催:あいち・平和のための戦争展実行委員会 会場:市民ギャラリー矢田



8月10日から13日にかけて「2017 あいち・平和のための戦争展」が開催された。この展示会は、戦争の実体を調査・記録し、戦争に反対する立場の約40団体からなる実行委員会により企画・運営され、今年で26回目を数える。

教化センターは「大谷派の戦争協力」をテーマに出展し、戦時中の「海外開教」および従軍僧侶の役割と実績についてパネル展示した。大谷派は過去の戦争に協力したことが知られているが、従軍僧侶はその一例である。軍隊に帯同し戦死者の儀式に携わっただけでなく、占領地にそのまま留まって開教拠点を設置する者もいた。

戦利品を日本に持ち帰って誇らしげに披露する僧侶の写真パネルが特に目を引き、来館者からは「平和の教を説く僧侶が戦争協力をしたことを知り驚いた」「どうして人殺しを正義とする戦争に賛同したのか」といった声が聞かれた一方で、「僧侶であっても日本人として戦争協力することは当然」といった意見もあり、過去の事実を通じて現代を見つめ直すことの大切さが改めて浮き彫りとなった。(研究員 新野 和暢)

研究生 活動報告

「御坊夏まつり」に出店

会場:真宗大谷派名古屋別院



8月19日から20日にかけて、名古屋別院で「御坊夏まつり」が開催され、私たち教化センター研究生(有志)は昨年引き続き、福島県双葉郡浪江町の名物「浪江太っちょ焼きそば」を出店した。期間中は晴天にも恵まれ、友人や、別院事業で知り合った子どもたち、そして毎年この焼きそばを楽しみにしてくれている方々など、たくさんの方にご来場いただき、両日ともに300食を超える大盛況だった。ピーク時には長い行列もでき、たくさんの方に「美味しかったよ」と言っていたことが嬉しかった。

今回の出店を通して、いろんな方が楽しみにしてくださっていることに改めて気づき、また来年以降も出店したいという思いが強くなった。そして、この「浪江太っちょ焼きそば」を通して、一人でも多くの方が福島のことを思ってくれたらいいなと願っています。(第11期研究生 ^{なべの りょうこ} 鍋野 了悟)

※収益の一部は「浪江太っちょ焼きそば」の製造元に寄付させていただきました

INFORMATION

教化センター日報 ■2017年6月～8月

- 6月1日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
- 9日 研究生・学習会「教と財」
- 15日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習
- 20日 教化センター運営会議
- 21日 研究業務「平和展」学習会
- 27日 研究業務「自死遺族支援者団体全国交流会」後援
- 30日 研究生・実習「真宗門徒講座(はじめての『歎異抄』③)」

- 7月7日 研究業務「平和展」学習会
- 10日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習
- 21日 研究生・実習「真宗門徒講座(はじめての『歎異抄』④)」
- 25日 第11期研究生 修了式
- 26日 研究業務「平和展」学習会

- 8月3日 研究業務「平和展」学習会
- 10～13日 「2017 あいち・平和のための戦争展」出展
- 19～20日 名古屋別院「御坊夏まつり」出店(研究生有志)
- 30日 研究生・研修「真宗本廟一日参拝 事前研修」

教化センターの 人事がありました

- 〈新任〉
業務嘱託
高木 祐紀
(2017年8月1日付)
- 〈異動〉
非常勤嘱託
田中 真理
(2017年8月1日付)
名古屋教務所へ

《雑感》

私が所属している名古屋教区児童教化連盟の活動の一つに「夏のつどい」がある。気がつけばスタッフとして10年関わり、子どもたちと学び、遊ぶことを経験させてもらっている。昨年に続き、今年も大学生にスタッフとして参加していただき、初対面だと思い「はじめまして、よろしくお願ひします」と挨拶したら、その中の一人から「お変わりないですね」と返ってきた。その方が小学生の時に、私が班担として関わっていたことを聞き、驚きと同時に恥ずかしい思いをした。その後、二人の大学生スタッフからも、私が班担をしていたことを教えられた。二度の驚きと反省。子どもとの関わり方をもう一度、見つめ直す「夏のつどい」になりました。(H²)

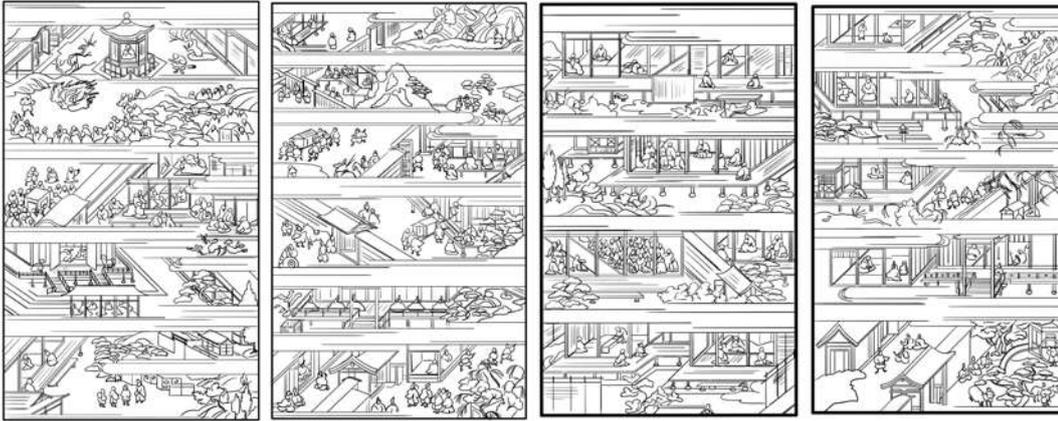


■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
〈貸出〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。